

# 女相撲民俗誌

亀井好恵著

慶友社 4800円

評・三浦 佑之 (古代文学研究者  
立正大教授)

「男は度胸、女は愛嬌」が理想とされる社会にあって、男をしのぐ力を持ってしまった女はどうなるか。さげすみや憐憫のこもった視線を浴びるしかないというのは、男社会における彼女たちの宿命かもしれない。その象徴的なパフォーマンスとして本書で取り上げられるのが、女相撲(興行と民俗行事との二類)と女子プロレスである。そのいずれにおいても、著者が注目するのは、女性が演じ手であることよって生じる、観る・観られるという関係性である。

地域の祭礼などで行われる女相撲は、東北と九州の各地に多く伝えられている。民俗学的には「雨乞い」に結びつく習俗とされ、それは、女のもつ霊力が雨を降らせるとか女が相撲をとるという「象徴的逆転行為」が雨を呼ぶとか説明される。ところが著者は、信仰と結びつけるよりも余興的な芸能として行われる事例が多いと指摘する。女たちが興行女相撲に親しむことで、その華やかさ、艶やかさに魅了され、「見る側から演じる側へと気持ちが変わる一瞬」があることを、著者は見逃さない。そうした演じ

## 観る・観られる関係性



1962年生まれ。大城成生(おしろしげ)氏。民俗学研究所研究員。『女子プロレス』など。著者亀井好恵(かめい・よしえ)の経歴と著書について。

手と観客との関係、両者の交替という視座が、堅苦しそうにみえる研究を魅力的にする。

江戸時代から記録のある興行女相撲や戦後にはじまった女子プロレスの場合も、観る・観られるという関係性は変わらない。しかもそこには、男たちの好奇心な視線がより強く表れる。江戸時代には盲人を相手にした女相撲が評判を呼び、女子プロレスの場合はエンターテインメント性を強くする。男子プロレスの立役者である力道山が女子プロレスを快く思っていなかったことに対する著者の説明もよくわかる。

すでに古く『日本霊異記』には力女の説話が語られ、『続日本紀』によれば朝廷は諸国から「力婦」を集めていた。それら力持ちの女たちの背後には、どこかもの悲しげな気配が感じられるのだが、いつの時代もそれは、越境する者たちに注がれる眼差しに起因するらしい。